

進捗状況の概要（2 ページ以内）

① 大学改革の加速

平成 29 年度に引き続きシステム e ポートフォリオ並びにモニタリングシステム「リフレクションカレッジ」の改修を行った。これにより、ベンチマーク改訂に伴う評価項目の対応を可能にし、項目のズレを解消した。また、リフレクションカレッジ上へのコメント記入をステーク・ホルダーである学生、教員、企業 3 者が同時に行えるようになり、リアルタイムで情報の共有、可視化を可能にした。

本学の教育基盤でもある「e ポートフォリオ」については、「目標・記録・評価の総合的ツール」として位置付けた改修を実施した。これは、従来の蓄積データに加え、「教職カルテデータ」「リフレクションカレッジ報告書」を統合し、卒業後にも加工が可能な状態で出力できるとともに、「学修成果サマリー（仮称）」として採用面接時等での活用を想定しているものである。

また、大学と産業界との評価観を共有するための糸口である従来の「AP 型インターンシップ」を、さらに学生の成長に繋がるアクティブラーニングの場とするため、より教育効果の高い「課題探究」の要素を入れたプログラムを導入実施した。これは、学生が企業担当者や教員の助言を元に課題を設定し探究するもので、成果報告会等でも高い評価を得た。今後は従来の「就業体験型」のインターンシッププログラムから、この課題探究型プログラムへの全面的な移行を図る予定である。

評価項目や実習後の評価のすり合わせを通じた教育の改善、また学生の自律的学修やフィードバックを通じた学生の自己評価能力向上など、これらのインターンシップを活用したフレームについては、今年度より本格的な取りまとめを開始しており、最終年度の総括及び外部発信に向けて整理・汎化を深めていく。

② 事業の実施体制

キャリア担当副学長、キャリアセンター長、評価センター長、各学科長で構成された AP プロジェクトメンバーが事業全体に係る推進、調整、立案を図った。平成 30 年度は課題探究型インターンシッププログラムを導入し、学生が所属する学科教員による指導を担当制にすることにより事前学修から事後学修まで一貫した学修及び評価項目・評価のすり合わせを可能にした。令和元年度から、この課題探究型インターンシップ指導担当者は AP プロジェクトメンバーも兼ねることになり、事業の運営体制の重層化を図ることとなる。

③ 事業の実実施計画・継続性

平成 30 年 11 月と 31 年 1 月に開催の成果報告会の後に企業担当者、外部評価委員、本学教職員によるインターンシップの情報交換と本学の AP 事業に関する意見交換ならびに今年度の総括を行った。評価委員や企業担当者からのご意見を受け、当該事業における今後取り組むべき課題や方向性、インターンシップルーブリックの活用方法等について運用の課題を整理することができ、今後の継続発展へ向けての意識改善に繋がった。

また、平成 30 年度は、宮崎国際大学と合同でのシンポジウムを開催し、参加頂いた文部科学省高等教育局 大学振興課 大学改革推進室 平野室長、外部評価委員、企業担当者の皆様から学修成果に関する企業視点、大学視点での問題提起を頂き今後の事業推進を図る示唆を頂いた。

次年度もシンポジウムを開催し本学 AP 事業のこれまでの歩みと成果について事業報告を行い、さらに成果の汎化について発信を行う予定である。

また、事業終了後については本事業で活用したモニタリングシステム「リフレクションカレッジ」の機能を既存の e-ポートフォリオに統合する改修を行うことによりランニングコストの削減とシステムの運用を次年度以降、継続する予定である。

④ 事業成果の普及

本年度、課題探究型インターンシップを実施した。この成果として企業と評価の摺り合わせを事前、事後と入念に行うことにより評価の観点と尺度の共有を具現化することができた。また、このプログラムでモニタリングシステム並びに自己評価書を活用することにより学生が自身の成長を可視化でき、自己評価能力も高めることができた。学内での成果として学生の自律的な学修がより深化し、インターンシップ以外の科目についてもその成果の拡がりを達成した。

事業終了後はシンポジウム開催、ホームページ他、様々なチャンネルを活用し取り組みとその成果発信を継続する予定である。

⑤ 選定されたテーマの取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組

テーマⅠ アクティブラーニング

PD等を通して教員の取り組みが高まったことでアクティブラーニング導入科目、授業外学修時間は確実に拡大し、学生の自律的な成長が全体に拡大した。またキャリアチューターもアクティブラーニングに大きく寄与した。先輩学生からの等身大の刺激を受けることにより、下級生学生が自らどう動くべきかをイメージしながら活動する習慣が身につくきっかけを与えた。

テーマⅡ 学修成果の可視化

インターンシップなどの学外学修においては事前学修、事後学修においてはアセスメントテストを活用し自身の現状を確認し実習による成長を客観的に可視化する。また実習中においてはモニタリングシステムを活用し日々、教員、企業担当がコメントを記入して指導することによりステークホルダそれぞれが学修成果をリアルタイムで可視化し共有することとなった。

課題探究型インターンシップでは、「自己評価書」を導入・試行し、目標設定から振り返りまでの客観的な可視化としての効果が確認された。今後は、このツールをeポートフォリオにおいて実施・蓄積していくことで、学修成果のサマリーを就職活動や卒業後に活用する流れを確立していく。